

ゆとりをもつて学力をつけたい

人としての常識や、考えたり議論したりする力の足りない秀才をつくるなど、教育に「ゆとり」が持ち込まれた。

一方で、学力低下の傾向を危惧する声も強くなっている。だが、「ゆとり」対「学力」という構図は変だ。どちらも子どもの成長には必要ではないか。

今回は、「理数系」の分野に目を向けて、ゆとりをもつて学力をつける道を探ってみよう。

江沢洋著『理科が危ない』（新耀社）の、刺激的なタイトルが、まず目にとまった。理科教育の危機は、新・学

習指導要領にはじまったわけではなく、「改訂のたびに骨抜きにされてきた」という。

教室の実情が、海外での経験も含め、多数紹介される。理科をとりまく社会環境や歴史的経緯も踏まえ、理科が抱える問題を論じていく。

「いま、高校生たちは理科が何であるか知った上で離れていつているのではない。知る暇もなく……尚早な選択を強いられ、安易についている」

「わかりやすさ」や「ひとつの答え」に安住しようとする、追求力や忍耐力の弱さが、目立ってきているのだ。

できるだけ短時間で、無駄を省いて効果的という「促成栽培」は、本来、教育にそぐわない。

「詰め込み」だってやりようだ。公式や年代の暗記も「頭の中で転がし転がしているうちに、実体となる。要は暗記の段階を突きぬけて一段上の高みに上ること」。それ

が想像力であり、創造性につながっていく。

著者の語る「学問温度の高い社会」とは、学問が「立体的な構造をもっていることを体得」できることだ。到底それは授業だけでは無理だから、「学生の自発的な探求」に委ねられる。科学の総合雑誌などにも期待されることだ。

また、理科を好きになるのは、単なる興味からだけではないと著者は考える。

「理科という道具をもつて宇宙をつかまえ制御しようとする自信ないし意志が駆動力として必要なのではなからうか?」

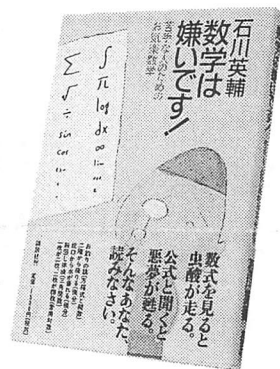
こういう気概のある先生が増えたらなあと思う。



『理科が危ない』
(新耀社/本体1,800円)

同じ著者の『理科を歩む』（新耀社/本体1,800円）は、科学史に登場する人物の逸話が豊富だ。

山口幸夫著『理科がおもしろくなる12章』（岩波ジュニア新書/本体780円）は、学校だけでなく、家庭でも「副読本」になる。科学史、最先端の科学、環境の三つのテーマに、物理、化学、生物、地学がうまく取り入れられている。



『数学は嫌いです！』
(講談社/本体1,500円)

つと身近になるのに。生活になじんだ考え方が、実は方程式や微分積分、対数のことだったりするのに驚く。通勤途上や昼休み、気楽に開いて、頭の体操を試みよう。

北野大著『ドクター北野の地球なんでも好奇心』（NHK出版/本体1,200円）は、心地よい語りによって、どこからでも読める。最新の

研究、日本の下町や先人の知恵などに学びながら、循環型社会を提唱する。それこそ、さまざまな「学力」が「ゆとり」の姿勢で結びついて可能になることではないか。

今のままで、本末転倒、朝令暮改に付和雷同、しまいに魘魅魍魎……となりかねない教育。これ以上、混乱させないでと言いたい。

(阿武 秀子)